Osaka University Knowledge Archive

Title	いわゆる「近称の指示副詞」について
Author(s)	岡﨑, 友子
Citation	語文. 1999, 73, p. 42-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68955
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

いわゆる「近称の指示副詞」について

岡崎友子

一　はじめに

現代日本語の指示詞については、近年活発な議論がなされその結果、高い水準の分析が得られるようになり、その複雑な用法も明らかにされるようになった。

表（1）

現代語	指示代名詞	指示副詞
近称	コノ・コレ・ココ	コウ・コンナ・コウイウ等
中称	ソノ・ソレ・ソコ	ソウ・ソンナ・ソウイウ等
遠称	アノ・アレ・アソコ	アア・アンナ・アアイウ等

しかし、それはコノ・ソノ・アノ等のいわゆる指示代名詞のみで、同じ指示詞体系に組み込まれている指示副詞については、現代語においてさえ、あまり考察の対象とされたこともなく、さらに歴史的な変遷については、橋本四郎（一九六六・三三〇頁）等で「カク→カウ→コー」「サ→サウ→ソー」という形態的な変化について言及されるのみで、古代語の「カク」と現代語の「コー（コウ）」との意味・用法の相違についてはまったく触れられることもなかったのである。

表（2）

古代語	指示代名詞	指示副詞
近称	コノ・コレ・ココ	カク・カカル・カヤウ等
中称	ソノ・ソレ・ソコ	サ・サル・サヤウ等
遠称	カノ・カレ・カシコ（アノ）（アレ）（アシコ）	（無し）

そこで、前稿（岡崎（一九九九））では、これらの指示副詞の意味・用法を明らかにする第一歩として、古代語の二系（近称・中称）対立のうちの一系である近称について、「カク」を中心にその歴史的変遷の記述をおこなった。[1]

今回は次の段階として、その変遷の本質的構造は指示副詞が修飾する述語の表すアスペクト・場面に関連するものであることを実証する。その方法としては、時代を上代・中古と現代に限定し、その時代の近称副詞が修飾する述語の表すアスペクト・場面を分析し比較することにより、その相違を明示する。

そして最終的に、岡崎（一九九九）で示した、指示副詞がバリエーション化していく（「カク（カウ）」から「カヤウ・コウ・コノヤ

ウ・コノゴトク・コウシテ」等へ）という変遷の本質的構造は、物事が表す状態・時間的局面をより分析的なものにしていくという変化の方向に結びつけられることになる。

今回は紙幅の制約から、時代を上代・中古と現代に、また用法を副詞的用法に絞らざるをえなかったが、他の用法を含めた各時代（上代から現代）を通じての論考、さらにもう一系の指示副詞である中称（「サ・サヤウ」等）の考察は、今後の課題としたい。[2]

二　古代（上代・中古）と現代の近称の指示副詞

二・一　指示副詞の用法と対象とする副詞的用法について

指示副詞を文中での働きによって分類すると、以下の〈連体詞的用法〉〈名詞的用法〉〈副詞的用法〉〈述語的用法〉になる。

〈連体詞的用法〉　名詞を修飾する。

(1)こんな車が欲しい。

〈名詞的用法〉「指示副詞＋の＋名詞」という形で名詞を修飾する。

(2)これくらいの荷物なら僕にだって運べるよ。

〈副詞的用法〉　動詞・形容詞・形容動詞・連用修飾語・「名詞＋だ」を修飾する。

(3)ハンドルは右にこう回してください。

〈述語的用法〉　述語となる。

(4)僕の田舎も昔はこんなだった（＝こんな様子だった）なあ。

これらの用法のうち、一で述べたように本稿では考察対象を〈副詞的用法〉のみに絞るが、〈副詞的用法〉はその表す意味から【用法1】～【用法6】に分類することができる。[3]

その分類とあわせて、岡崎（一九九九）の調査結果より、現代の「コウ」と上代・中古の「カク」の各副詞的用法での使用を表(3)にまとめる（各用法の内容については、【用法1】から【用法3】は本稿第三節で、【用法4】は第四節で述べる）。

表（3）

用法	現代「コウ」	上代・中古「カク」
【用法1】《動作／作用の様態》（説明・分析）	○	○
（その他）	×	○
【用法2】《変化の様相》（説明・分析）	○	○
（その他）	×	○
【用法3】《非意志的作用の様態》	×	○
【用法4】《静的状態の容子》	×	○
【用法5】《言語的内容》	○	○
【用法6】《程度》	○	○

（使用有○使用無×）

表(3)から分かるように、現代の「コウ」は上代・中古の「カク」に較べ、使用できる用法の範囲がかなり狭い。

これは結論を一部先取りして述べると、現代の「コウ」はアスペクト対立の成立しない述語は修飾することができない。そしてまた、アスペクトが成立する述語でも説明・分析の場面でないと使用できない。それに対し、上代・中古の「カク」にはそのような制限がないのである。

詳しくは、第三節でアスペクト対立の成立する述語について、第

四節でアスペクト対立が成立しない述語について考察していくことにする。

二・二　対象外の副詞的用法

なお本稿では議論を単純化するために、【用法5】【用法6】は扱わない。その理由として、【用法5】は発言・思考を表す動詞（「言う・思う」等）を修飾して発言・思考の内容を表し、また【用法6】は形容詞・形容動詞・連用修飾語を修飾して、それらが表す程度が大きいことを表すものであり、【用法1】から【用法4】までとは、かなり意味的に差異があると思われるからである。また岡崎（一九九九）の調査で、【用法5】はその用法にほとんど歴史的変化はなく、【用法6】は他の用法とは別の歴史的変化の側面を持っていることが明らかになっている。【用法5】【用法6】まで含めた指示副詞の総合的な分析は、今後の課題としておきたい。

【用法5】と【用法6】の例を以下に示しておく。

【用法5】《言語的内容》

(5)「おい、大事件だ。」こう言いながら、鷲尾編集長が部屋に入ってきた。

【用法6】《程度》

(6)「暑い、暑い。」「ほんと、こう暑いと外に出かけたくないわ。」

ところで、これらの近称の指示副詞の指示領域は、指示代名詞（コノ・コレ・ココ）と同じで、用法も同じく直示・照応用法を持つ。但し、古代（上代・中古）における近称の指示副詞の指示領域については、指示代名詞の指示領域の複雑な歴史的変化と深く関連しており、その指示領域についても別に考察する必要がある。

二・三　現代の「コウ」について

次の表（4）に【用法1】～【用法4】に用いられる上代・中古と現代の近称の指示副詞をまとめておく。[4]

このように現代には様々な指示副詞が存在するが、古代（上代・中古）においては「カク（カウ）」と、「カク（カウ）」より遥かに勢力の弱い「カクノゴト」「カ（ク／ウ）ヤウニ」のみであった。

この事実から、現代においては「コウ」とその他の指示副詞それぞれに、何らかの機能・表現の相違があり、それにより使い分けがなされているが、古代（上代・中古）にはそれがほとんどなかったという予測がたつ。

そこで、現代の「コウ」とその他の指示副詞の用法を詳しく分析・考察し、それぞれの機能・表現の相違を明らかにすることが必要であろう。

まず、現代の「コウ」についてだが、「コウ」はその使用に以下のような制約があることが金水敏他（一九八九）『日本語文法セルフ・

表（4）

上代	中古	現代
カ・カク 〔カクノゴト〕	カク（カウ） カ（ク／ウ）ヤウニ 〔カクノゴト〕	コウ コノヨウニ・コウシテ コウヤッテ・コンナ風ニ コウイウ風ニ コノ通リ（ニ）

（〔カクノゴト〕はあまり用いられていない）

マスターシリーズ4指示詞』（以後『セルフ』）に指摘されている。

「こう」は、眼前の動作を直接指し示しながらその様態そのものの説明・分析を行うときだけに用いる。（中略）また、指示詞と動詞の間に他の成分が入るときは、「こう」は使えない。

『セルフ』（57頁）

そして実際に【用法5】【用法6】以外で用いられている「コウ」を観察し分析すると、次のような「コウ」の性質が考えられる。

〈仮説・現代語「コウ」の性質〉

「コウ」は発話とともに［I］で［II］を示しその様態・様相を表す。

［I］指し示す身体的動作（指・視線・顔の向き・体の動き等で対象を指し示す動作）。

［II］発話者（A）または眼前の他者[5]（B）が動作・作用をおこなっている、その動作・作用の主体か客体。

①主体を示す場合、（A）（B）の動作・作用の様態を表す。

②客体を示す場合、（A）（B）の動作・作用によって現れる変化の様相を表す。

（7）この牛肉はここに包丁を入れて、こう切ります。

（8）この牛肉はここに包丁を入れると、こう切れます。

つまり「コウ」は発話とともに［I］（身体的動作）で［II］の主体か客体のどちらかに焦点をあて、その様態・様相を表すという働きをしているのである。（本稿では、この［II］①を【用法1】《動作／作用の様態》、［II］②を【用法2】《変化の様相》とする。）なお、［II］の動作の主体が発話者（A）であった場合、発話者は［II］と［I］を同時におこなうことになり、発話者は自ら［II］の動作・作用をして見せるということで［I］を実現することになる。

他の近称の指示副詞もこの「コウ」と同じく、発話により自分や眼前の動作・作用を指し示しその様態・様相を表す働きをする。しかし「コウ」が他の指示副詞と違うところは、必ず［I］（いわば、身体的指示動作）を伴うことである。

この「コウ」の強い指示行為は、「自分または眼前の動作・作用の様態」「自分または眼前の動作・作用により起こった変化の様相」を聞き手に差し出してみせるという行為になる。そして、この「動作・作用の様態、変化の様相」を差し出して聞き手に見せるという行動が、その動作・作用、またはそれによる変化そのものを聞き手に説明・分析する為と解釈され、それにより「コウ」は次の〈1〉〈2〉のような場面でしか用いることができないと考えられる〈仮説・制約1〉。

〈仮説・制約1〉「コウ」は〈1〉〈2〉の場面でしか用いることができない。

〈1〉発話者（A）の動作・作用、または眼前の他者（B）の動作・作用を直接指し示しながら、その動作・作用の様態そのものの説明・分析を行う。

〈2〉発話者（A）の動作・作用、または眼前の他者（B）の動作・作用の結果現れた変化の様相そのものの説明・分析を行う。

（説明・分析＝「動作・作用の仕方・なされ方」「動作・作用・変化のありよう」等を聞き手に教えたり、解説したりすること。）

次に「コウ」がこのように〈1〉〈2〉の場面でしか使用できないとすると、「コウ」の副詞的使用には、さらなる制限が考えられる。それは「コウ」が修飾するのは〈1〉〈2〉の場面だけ、つまり外的

に動態的状態を表している述語（アスペクト対立の成立する述語）しか修飾できないとすると、「コウ」は静的状態を表す述語（アスペクト対立の成立しない述語）を修飾できないことになる〈仮説・制約2〉。そしてまた、動態的状態を表す述語でも、発話者・眼前の他者の動作・作用（またその動作・作用の結果の変化）ではない、非意志的な作用を表す述語は修飾できないと考えられる〈仮説・制約3〉[6]。

〈仮説・制約2〉「コウ」は静的状態を表す述語（アスペクト対立が成立しない述語）は修飾することができない。

〈仮説・制約3〉「コウ」は非意志的な作用を表す述語は修飾できない。

では、各副詞的用法（【用法1】から【用法4】）での現代語「コウ」の〈仮説・制約1〉〈仮説・制約2〉〈仮説・制約3〉を確認し、また古代語（上代・中古）の「カク」にはこのような制約がなかったことをあわせて示すことにする。

三　アスペクト対立の成立する述語について
――【用法1】から【用法3】――

この第三節では、アスペクト対立の成立する述語を指示副詞が修飾する用法について述べる（【用法1】から【用法3】）。

では、まず初めに論を進める上で必要な、アスペクトの概念について説明しておく。

三・一　テンス・アスペクトと動詞分類について

工藤真由美（一九九五）によれば、現代共通語のテンス・アスペクトは、概ね次のように捉えることができる。

テンス……過去時制と非過去時制の対立として示される、事象と発話時との外的時間関係の相違

アスペクト……完成相と継続相の対立によって示される、同一の動態的事象に対する時間的展開（内的時間）の側面からの捉え方の相違

そして時間表現は表(5)のように、外的時間であるテンスと内的時間であるアスペクトとが統一する形で表現されている。

但し、この表（5）に見られるテンス・アスペクト対立は動詞に限られ、「湖面は美しかった」「教室は静かだった」「太郎は病気だ」のように時間的展開のない形容詞・形容動詞・名詞述語、また動詞述語のなかでも「ある、いる」のような存在動詞や、金田一春彦（一九五〇）の動詞分類で第四種とされる「すぐれている」等を述語とするものは、テンス対立は成立するがアスペクト対立は成立しないのである。本稿は、工藤（一九九五）のアスペクト対立の成立の有無による動詞分類に従い、動詞を次のように分類する。

表（5）

テンス＼アスペクト	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

○外的運動動詞（アスペクト対立が成立する）開ける・着る・食べる等

○静態動詞（アスペクト対立が成立しない）ある・いる・異なる・すぐれている等

○内的情態動詞（典型的アスペクト対立は実現しない）思う・考える等

さらに外的運動動詞は工藤（一九九五）で、「主体動作・客体変化動詞」「主体変化動詞」「主体動作動詞」に下位分類される。本稿は、指示副詞の用法の観点から、この分類をさらに以下のように下位分類する。

○外的運動動詞

［A］「主体動作・客体変化動詞〔他動詞〕」―あける・あむ・おる・きる等

［B］「主体変化動詞」

［B1］「主体変化／主体動作〔再帰動詞〕」「人の意志的な変化動詞〔自動詞〕」―かぶる・つかむ・たつ等

［B2］「ものの無意志的な変化動詞〔自動詞〕」―あく・おれる・きれる・まがる等

［C］「主体動作動詞」

［C1］「主体動作／客体動き（接触）動詞〔他動詞〕」「人の意志的動作動詞〔自動詞〕」「人の認識活動・表現活動動詞〔他動詞〕」―まわす・おす・あるく・はしる・にらむ・おどる等

［C2］「ものの非意志的な動き（現象）動詞〔自動詞〕」―ふく・とぶ・かれる等

この外的運動動詞述語を指示副詞が修飾するのが【用法1】から【用法3】であり、また、静態動詞・形容詞／形容動詞・名詞述語を修飾するのが【用法4】である。

では「コウ」の〈仮説・制約1〉〈仮説・制約2〉〈仮説・制約3〉について、【用法1】【用法2】【用法3】の順に検証してみることにする。

三・二【用法1】《動作／作用の様態》について

この【用法1】は［A］［B1］［C1］の外的運動動詞を修飾して、発話者の動作・作用、または発話者が指し示している眼前の他者の動作・作用の様態を表す。この【用法1】の場合、述語はすべて、アスペクト対立が成立し〈仮説・制約2〉、非意志的な作用ではない〈仮説・制約3〉ので、場面〈仮説・制約1〉のみが問題となる。

まず(9)(10)は、〈仮説・制約1〉〔1〕の場面であるので「コウ」は用いることができる。（＊は非文法的であることを表す）

(9) ［A］煮付け用の大根は〔こんな風に／こうして／こうやって／こう〕切ってください。

(10) ［C1］（舞台練習で）太郎が出てきたら、次郎はここを〔こんな風に／こう〕歩く。

それに対し、次の(11)(12)のように〈仮説・制約1〉の場面でない場合（(11)(12)は「歩き方・歩きよう」「編み方・編みよう」を説明・分析していない）には「コウ」は用いることができない。

(11) ［C1］（銀座でデート中）太郎君、東京に来てから一度でも女の子と〔こんな風に／こうして／＊こう〕歩いた？きっと、もてないから無理ね。

(12) ［A］（先生が授業中、生徒を見ながら心の中で）毎年バレンタ

イン前になると、女生徒はみんなセーターを〔こんな風に／こうして／＊こう〕編んでいるなあ。

ところで、アスペクト対立の成立する述語でも、その動詞の語彙的意味において〈仮説・制約1〉の場面には合わない動詞がある。それは、人の社会的変化を表す［B1］「結婚する・就職する」等や、人の長期的動作を表す［C1］「経営する・通勤する」等である。

(13)［C1］（父親が子供とテレビを見ながら）東京のサラリーマンは、毎朝〔こんな風に／＊こう〕通勤するんだ。

では、上代・中古におけるこの【用法1】の例をみてみよう。

〈仮説・制約1〉の場面ではない。「コウ」不可〕

(14)「まことぞ。をこなりと見てかくわらひいまするがはづかし」などのたまはするほどに、内裏より式部の丞なにがしまゐりたり。（枕草子・二七八段）（馬鹿だと思って、こうして笑っておりなさるのがきまりわるい）

(15)わが身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへると思すに、いみじくて（源氏物語・須磨）（家郷を棄ててきて、（一緒に）こうしてさまよっていてくれる）

〈仮説・制約1〉〔1〕の場面。「コウ」可〕

(16)しなざかる　越の君らと　かくしこそ［可久之許曾］　柳かづらき　楽しく遊ばめ（万葉集・四〇七一）（柳をこう縵（髪飾り）にし、楽しく遊ぼう）

(17)里分かぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる「かう慕ひ歩かば、いかにせさせたまはむ」と聞こえたまふ。（源氏物語・末摘花）（私がこうつけ回したら、どうなさいます）

以上のように、上代・中古におけるこの【用法1】の「カク」には、現代の「コウ」のような制約はない。

三・三　【用法2】《変化の様相》について

この【用法2】は［A］［B2］の動詞を修飾し、発話者または眼前の他者の動作・作用の結果現れた変化の様相を表す用法である《変化の様相》。この【用法2】も【用法1】と同じく、述語はすべて、アスペクト対立が成立し〈仮説・制約2〉、非意志的な作用ではないので〈仮説・制約3〉、場面〈仮説・制約1〉のみが問題となる。

(18)［B2］二本の電線は熱を加えると、〔こう／こんな風に〕つながります。

(19)［A］二本の電線を〔こう／こんな風に〕つなげてください。『セルフ』

(18)(19)は〈仮説・制約1〉〔2〕の場面にあたるので、「コウ」が使用できる。なお(19)のように動詞が［A］の場合は、【用法1】《動作／作用の様態》【用法2】《結果の様相》どちらも表すことができる。そして次の(20)(21)のように〈仮説・制約1〉の場面でないものは「コウ」は使用できない。

(20)［B2］去年日焼けした時も、皮が〔こんな風に／＊こう〕むけたなあ。

(21)［A］（街角のクリスマスツリーを見ながら）妻が生きてた頃は、家も毎年ツリーを〔こんな風に／＊こう〕かざったなあ。

では次に、上代・中古におけるこの【用法2】の例をみてみよう。

〈仮説・制約1〉の場面ではない。「コウ」不可〕

(22)いと細く小さく結びたるあり。「これはいかなれば、かく結ぼほ

れたるにか」とてひきあけたまへり。（源氏物語・胡蝶）（何故こうして結んであるままなのか）

(23)君にかくひき取られぬる帯なればかくて絶えぬる中をかこたむ（源氏物語・紅葉賀）（あなたにこうして取られてしまった帯ですから）

〈仮説・制約1〉〔2〕の場面。「コウ」可〕

(24)かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔の賢き人だに、はかばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ（源氏物語・須磨）（こうなってしまった人）

以上のように、上代・中古におけるこの【用法2】の「カク」にも現代の「コウ」のような制約はない。

三・四 【用法3】《非意志的作用の様態》について

この【用法3】は〔C2〕の外的運動動詞を修飾して、その非意志的な作用の様態を表す。この用法はすべて〈仮説・制約3〉に違反するため「コウ」は用いることができない。

(25)「こうやって二人で坐っていると、三年前のことを思い出しますね」

「あのときも〔こんな風に／＊こう〕風が吹いていたね」『セルフ』

では、上代・中古における【用法3】の例をあげる。

(26)妹に恋ひ　寐ねぬ朝明に　をし鳥の　こゆかく渡る［従是此度］妹が使か（万葉集・二四九一）（おし鳥がここをこのように飛び渡るのは、あの娘の使いなのか）

(27)ただ今も渡りたまはなんと待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなんや。（源氏物語・真木柱）（こんな風に日も暮れようとしているのに、どうしてお離れになるはずがあろう）

以上のように、上代・中古のおけるこの【用法3】の「カク」にも、現代の「コウ」のような制約はない。

四　アスペクト対立が成立しない述語について
――【用法4】――

この第四節では、現代語「コウ」はアスペクト対立の成立しない述語を修飾することができず〈仮説・制約2〉、上代・中古の「カク」にはそれができたことを示す。

なお現代語において、このアスペクト対立の成立しない述語を修飾することができる近称の指示副詞は「コノヨウニ・コンナ風ニ・コウイウ風ニ・コノ通り」である。

四・一 【用法4】《静的状態の容子》について

近称の指示副詞が、静態動詞述語・形容詞／形容動詞述語（形容詞／形容動詞〔＋助動詞〕）・名詞述語（名詞（句）＋判定詞〔＋助動詞〕）を修飾する場合、指示副詞はその静的状態の容子を表す。この用法を本稿では【用法4】《静的状態の容子》と呼ぶ。以下に現代語の例文を示す。

(28)（講演で科学者がビデオ映像を指差し）地球上にはまだ、我々の測り知れない現象が〔このように／＊こう〕存在しています。

(29)勇介くんは小さい頃から、〔この通り／このように／＊こう〕しっかりしている。

(30)昨日、政府からこの地域に戒厳令がでました。だから、警備が〔この通り／こんな風に／＊こう〕厳重なんです。

(31)お盆も過ぎると、この海の家に来る客も〔この通り／このように／＊こう〕少ない。

(32)一人で外国に行かすなんて無茶は言わないでください。太郎はまだ、〔この通り／このように／＊こう〕子供なんです。

以上のように、現代の「コウ」はアスペクト対立の成立しない述語を修飾して、その《静的状態の容子》を表すことができない〈仮説・制約2〉。現代の「コウ」は他の指示副詞と違い、アスペクト対立の成立しない述語を修飾すると《静的状態の容子》を表すのではなく、【用法6】《程度》を表してしまう。

(31)′お盆も過ぎて、この海の家に来る客もこう少ないと、商売にならない。

では上代・中古における【用法4】の例をあげる。

〔存在動詞〕

(33)蓮葉は　かくこそあるもの〔如是許曾有物〕　意吉麻呂が　家なるものは　芋の葉にあらし（万葉集・三八一二六）（蓮の葉は、こんな風にこそあるものだ）

(34)おほせごとに、「かう帝もおはしまさず、睦じく思し召しし人をかたみとおもふべきに（大和物語）（このように帝もいらっしゃらず）

〔形容動詞〕

(35)「世は尽きぬるにやあらむ。もの心細く例ならぬ心地なむするを、天の下かくのどかならぬによろづあわただしくなむ」（源氏物語・薄雲）（世の中がこのように穏やかでないので、何かにつけて落ち着かないのです）

〔形容詞〕

(36)「いと際々しうものしたまふあまり、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。」（源氏物語・篝火）（それが気に入らないので、このようにそっけないのだろう）

〔名詞（句）〕

(37)宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわずらはしき身にて侍れば。（竹取物語）（このように煩わしい身の上でございましたので）

このように、上代・中古の「カク」は現代の「コウ」と違い、アスペクト対立の成立しない述語を修飾して《静的状態の容子》を表すことができた。しかし、「カク」から「コウ」へと歴史的に変化していくうちに、アスペクト対立の成立しない静的状態を表す述語を修飾する場合には、【用法6】《程度》しか表せなくなったのである。

五　最　後　に

ここまでに検証してきたことを、以下にまとめる。

[I]現代の「コウ」は《動作／作用の様態》や《変化の様相》そのものを説明・分析する場合にしか用いることができないが、上代・中古の「カク」はそれ以外の場合にも用いることができた。（→【用法1】【用法2】〈仮説・制約1〉）

[II]現代の「コウ」は非意志的な作用を表す述語を修飾することができないが、上代・中古の「カク」にはできた。（→【用法

3】〈仮説・制約3〉）

［Ⅲ］現代の「コウ」はアスペクト対立の成立しない述語を修飾して《静的状態の容子》を表すことができないが、上代・中古の「カク」にはそれができた。（↓【用法4】〈仮説・制約2〉）

つまり、この［Ⅰ］［Ⅱ］［Ⅲ］で示した現代の「コウ」と上代・中古の「カク」との相違が、歴史の流れの中で「カク」が、「カク→カウ→コウ」と形態的に変化していく過程で失っていった機能・用法であるといえる。

この変化は、「カク」が上代で「ゴト（如）」、中古では「ヤウ（様）」を修飾することによりできた「カクノゴト」「カヤウ」の出現から始まる。[7] この「ゴト（如）・ヤウ（様）」という静的状態を表す語と複合することにより、「カク」は述語の表す状態をより分析的に表現し始めたのである。

そして、中世以降になると「カウシタ（コウシタ）・コノゴトク・コノヤウ・コウヤッテ」が次々と現れ、指示副詞によって述語の表す状態・時間的局面を、より分析的に表現する方向へと進んでいくことになるのである。

最後に、この［Ⅰ］［Ⅱ］［Ⅲ］のそれぞれが、何時このように変化したのかについては、未だ調査・分析の段階であり、いずれ稿を改めて論じることとしたい。

注

（1）指示副詞は現代語には近称コ・中称ソ・遠称アの三系が存在するが、古代語（上代・中古）には近称カ・中称サの二系しかない。この中称サ系は上代・中古において、照応・観念用法しかなく、現場の対象を直接指示することができたのは近称カ系だけであった（岡崎（一九九九）より）。つまり古代（上代・中古）の近称カ系は、現代の近称コ・中称ソ・遠称アの指示副詞が指示するすべての範囲の対象を直示することができたのである。

（2）資料は、『万葉集』（小学館日本古典文学全集・おうふう）、『源氏物語』（小学館新編日本古典文学全集）、『土左日記』『竹取物語』『大和物語』『伊勢物語』『枕草子』『更級日記』は岩波日本古典文学大系を使用した。

（3）今回の分類は、岡崎（一九九九）で提案したものに修整を加えたものである。

（4）ここで、古代語・現代語において、どの語を二語の指示副詞として認めるかという問題がある。例えば「コウシテ・コウヤッテ」は、【用法1】のように被修飾動詞の動作・作用そのものの様態を表す一方、以下の〔1〕〔2〕のように、被修飾動詞の動作・作用と時間的・空間的に共存する動作・作用の様態を表す用法がある。（「コウ」には、この働きはない）

〔1〕授業が終わるまで、〔こうして／こうやって／＊こう〕立っていなさい。

〔こうして／こうやって〕＝「バケツを手に提げたまま」「こうしたまま」

〔2〕「いつまで入ってるの！」「〔こうして／こうやって／＊こう〕風呂に入るのが俺は好きなんだ」

〔こうして／こうやって〕＝「本を読みながら」「こうしながら」

これは南不二男（一九九三）の従属句A・B・C類の三段階のうち、もっとも従属度の高いA類（〜テ1）と同じ働きをするものである。南（一九九三）でも、このA類「〜テ1」について、「いわば状態副詞的（七九頁）」とするように副詞の用法と連続しているのである。

そこで本論では、「コウシテ・コウヤッテ」については【用法1】を持つことから、一語の指示副詞として扱い、被修飾動詞と並行して行われる副次的な動作・作用の様態しか表さない「こうしながら・こうしたまま」等は従属句とする。古代語でこの従属句にあたるものとして考えられるのは「カクテ・カクシツツ・カクナガラ」等である。以下に例を示す。

〔3〕水底に　生ふる玉藻の　生ひ出でず　よしこのころは　かくて通はむ［如是而将通］（万葉集・二七七八）（こうして（＝人目を忍びながら）あなたのもとに通おう）

〔4〕嘆きつつわがよはかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく（源氏物語・賢木）（こうして（＝嘆きを繰り返しながら）過ごせというのか）

〔5〕「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる」（源氏物語・蓬生）（こうしたまま朽ち果ててしまおうと）

但し、「こうして・こうやって」が【用法1】と〔1〕〔2〕のような用法を併せもつこと、また古代語「カク＋（テ・ナガラ）」が、現代語には「コウ＋シ＋テ」「コウ＋シタ＋ママ」等に変化していることなど、本論の考察対象である「カク→コウ」変化と決して無関係ではなく、総合的に扱う必要がある。今後の課題である。

(5) 眼前の他者とは、次の例のように人でない場合もある。

〔1〕（昨日の台風の様子を話している）

濁流が、人をこうのみこんだんです。

〔2〕さっき風がこう吹きつけてきて、髪がこんなに乱れちゃった。

この「コウ」は、「濁流・風」の「のむ・吹く」といった非意志的な作用の様態を表すように見える。しかし、この様態は発話者の〔I〕（身体的運動）によって再現されることにより表すことが可能になるものであり、「濁流・風」の非意志的作用を直接示すものではない。

(6) (5)で示したように、発話者の〔I〕（身体的動作）で再現可能な様態の場合のみ、「コウ」は非意志的作用を表す述語を修飾することができる。

(7) 上代の「カクノゴト」は用例は非常に少ない。また中古以降「如（し）」は築島裕（一九六九）『平安時代語新論』（東京大学出版会）で述べるように漢文訓読特有の語であり、「カクノゴト」は和文ではほとんど見られない。また中古には用例は非常に少ないが「カヤウニ」とほぼ同じ働きをする「カク（カウ）ザマニ」がある。

参考文献

金水敏・木村英樹・田窪行則（一九八九）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4指示詞』くろしお出版

金水敏（一九九六）「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院・一六九―一九七頁

金田一春彦（一九五〇）「国語動詞の一分類」『言語研究』（金田一（一九七六）に所収・五―二六頁）

金田一春彦編（一九七六）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテクスト――現代日本語の時間の表現』ひつじ書房

鈴木泰（一九九一）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析』ひつじ書房

橋本四郎（一九六六）「古代の指示体系――上代を中心に――」『国語国文』第三五巻第六号　遠藤嘉基博士還暦記念国語學特輯号第二（京都大学文学部国語国文研究室）三二九―三四一頁

橋本四郎（一九六一）「かより合はば――接頭語と指示副詞と――」『女子大国文』第二〇号（京都女子大学）（『橋本四郎論文集　国語学編』（一九八六）角川書店に所収・一九五―二〇八頁）

南不二男（一九九三）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森山卓郎（一九八八）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

岡崎友子（一九九九）「指示副詞の歴史的考察――「カク」を中心に――」文部省科学研究費研究成果報告書『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式――落語資料を中心として――』（研究代表者・金沢裕之）一〇七―一三六頁

――本学大学院博士後期課程――